バイオテクノロジーは両刃の剣か？

林　良　博

東京大学農学部長

1．開発主義的科学から総合主義的科学への転換

農学への期待が各界から寄せられている。その期待の多くは、総合主義的科学としての農学であって、20世紀の開発主義的科学に対してではない。例えば吉川弘之放送大学長の「20世紀は農業が工業化された世紀であったが、21世紀は工業が農業化される世紀である」といった発言は、総合科学としての農学への期待である。

2．男性型視点から女性型視点への転換

開発主義的科学とは、吉川先生が主張されるように「男性的視点」の科学であるのに対して、総合主義的科学である農学は「女性的視点」の科学、あるいは持続的な科学といえるだろう。21世紀にますます深刻さを増すと考えられる環境問題や生命倫理問題に対処するには、女性型の視点が重要であるということは言うまでもない。多くの人々が農学に期待していることのひとつはこの点にある。

3．「育てる」生産を担う農学の優位性

農学の特性はまた、「造る、making」の生産ではなく、「育てる、growing」の生産を担う科学であることにある。育てる生産は、生物のもつ可能性をいかに引き出すか、生物が育つ環境をいかに整えるかに依拠しており、造る生産のような開発主義的な生産とは異なる。農学の特性が総合主義であることの理由はここにも求められる。農学の思想は、本来的に環境破壊とは合い入れないものである。

4．バイオテクノロジーは両刃の剣か？

バイオテクノロジーは、生物のもつ可能性を最大限に引き出す新たな技術という面では農学の確かな一分野であり、今後の発展が大いに期待される。とくに従来の育種技術などでは達成できなかった耐病性、耐暑性、耐塩性遺伝子の組み替え技術は、自然界では数百万年も要するかもしれない自然淘汰による形質の獲得を短い時間で成し遂げるものであり、農学にとって「夢の技術」といえるであろう。

しかし一歩間違うと、「夢の技術」が悪夢にかわるかもしれないという危惧を多くの人々が抱いていることも事実である。その危惧の多くは、説明責任の不充分さによる誤解に基くものであるが、一部において環境倫理あるいは生命倫理的検討を研究者自身が欠いていることに原因がある。いまこそ総合科学としての農学の智をバイオテクノロジーにおいて生かすべきであろう。